

# インターネットで学ぶ英語学習プログラム

## *e-sia* (イー・ジア<sup>i)</sup>)

野澤和典

### 0. はじめに

インターネット接続の高速化と大容量データの送受信が可能になったブロードバンド化<sup>ii)</sup>が進み、低価格パソコンの登場で各個人が占有できたり、家族と共有できたりするパソコンも普及してきている現在、様々なスタイルのオンライン学習が可能になってきている。その中でオンライン英語学習については、多数の有料・無料の自学自習サイトがサイバー・コミュニティに存在し、ネットワークに繋がったパソコンや携帯端末があり、積極的かつ継続的な学習意欲があれば、学べる環境が整いつつある。*e-sia*: Internet English School (以下 *e-sia* IES と略す。) は、アニメーションで楽しく学んで、英語のスキルアップを目指す学習者 (TOEIC 300点から500点レベルの学習者) を対象とした有料オンライン・サイトのひとつとして、あるいは大学などのイントラネット環境での e-learning サイトとして、Janet (Japan Network Systems Corporation) が開発・提供している。本稿では、主として *e-sia* IES のイントラネット版についてのレビューをし、オンライン英語学習の一形態を紹介すると共に、その利点・欠点を論議し、今後の理想的なオンライン英語学習のあり方を問うものである。

### 1. TOEIC<sup>®</sup>テスト<sup>iii)</sup>と *e-sia* (イー・ジア)

今や TOEIC<sup>®</sup>テストは、海外事業に関連する業務に携わっている者だけではなく、進学・就職・昇進など様々な場面やクラス分けのためのプレイズメント・テストとして英語力を測る手段のひとつとして重要視されるようになってきている。また、TOEIC<sup>®</sup>テスト受験経験者の苦勞話や得点力アップした成功例などについて提供するインターネット・サイトがたくさん存在する<sup>iv)</sup>。*e-sia* IES が提供する有料サイト (<http://www.e-sia.com/>) および無料体験版サイト (<http://demo.e-sia.com/>) もその例である。

## 2. *e-sia* IES の概要

### 2.1 Let's *e-sia* (学習)

まず, *e-sia* IES インターネット版サーバにアクセスすると, 図1のような顔のマウスポインターが動き回る Flash で作られたホームページ画面が現れ, 開始ボタンをクリックすると, 図2のようなトップページ画面となる。イントラネット版の場合は直接図2のようになる。ここで「Let's *e-sia* (学習)」、「About TOEIC (TOEIC 情報)」、「Help (ヘルプ)」のいずれかを選択することになる。



図1 ホームページ画面



図2 トップページ画面



図3 認証画面



図4 コンテンツ・メニュー画面

Let's *e-sia* (学習) メニューをクリックすると, まず利用者の ID と Password 認証が行われる。(図3参照)そして, コンテンツ・メニュー画面(図4参照)となり, 「Let's Study! (学習)」、「Let's Do It! (TOEIC<sup>®</sup> TEST の模擬問題)」、「Let's Try Again! (復習 TEST)」、「Check Out! (問題の正答と解説)」、「Keep It Up! (オリジナル問題)」、「Go Higher! (めざせ600点)」、「Brush Up! (スキル別学習法)」、「Trouble! (藤森ケンジの困った時の英会話)」というメニュー項目から利用したいものを選択することになる。

#### 2.1.1 「Let's Study! (学習)」

「Let's Study! (学習)」をクリックして学習し始めると, 学習メニューとしてストーリー1 (シン



図5 学習メニュー画面



図6 ストーリー1のメニュー画面

ガポール出張編)とストーリー2(アメリカ・ヨーロッパ出張編)のいずれかを選択できる。(図5参照)ストーリー1では、コンピュータ商社「ジャネテック社」に勤める「藤森ケンジ」がシンガポール出張に行って、日本に帰国するまでに起こる出来事を「Scene 1」～「Scene 20」の場面に分けて学んでいくものである。(図6参照)同様に、ストーリー2は、米国製特殊半導体を取り扱う会社「スメラギ社」に勤める「田尾昌義」と「安藤義之」という2人の登場人物が商談のためアメリカ、イギリス、そしてドイツで開催されるメッセに出向く際に遭遇する様々な出来事を「Scene 1」～「Scene 24」の場面に分けて学んでいくものである。どちらも海外ビジネス出張を通して遭遇する英語を学び、異文化体験をするという設定であり、ビジネスの世界で英語を使わざるを得ない状況を仮定して実践的な場面が提供されている。できれば、ストーリー3として、取引先からの訪問者：日本出張編などがあって、日本人・日本文化とのコミュニケーション摩擦と克服法や非言語コミュニケーションを中心としたコンテンツのものがあるとよいであろう。



図7 Scene 1の開始前画面



図8 Scene 1の開始後画面

各 Scene に入って学習するには「GO」ボタンをクリックするが、図7のような学習が開始できる状態となる。そして、アニメーションを見るために「Play」ボタンを押すと、図8のようになり、「字幕あり」か「字幕なし」の選択ができる。また、ストーリー1については、「スクリプトと和訳」ボタンもあり、簡単に日本語でも状況が理解できる。易しいレベルのコンテンツにおいては「字幕なし」あるいは「スクリプトと和訳」なしでも十分対応できるし、教員としてはそうするように指導すべきであるが、非英語母語話者の学習者にとっては、聞けない音や表現は何度聞いても難しいものでもあるし、効率的な学習をするためにも、選択肢として「字幕あり」の

選択ができるのは理想的であろう。ただし、この登場人物の英語は必ずしも英語母語話者だけではなく、流暢な英語を話す非英語母語話者も含まれており、聞きやすいものもある。「国際語としての英語」という視点からは、コミュニケーション・ツールとして様々な英語（A variety of Englishes）が世界中で存在し使われている現状を考えると、シンガポール編であれば、少し聞きにくくともシングリッシュ（Singlish）が使われている場面をもっと入れても良かったのではないかと思う。



図9 mp3 ファイルの音声画面



図10 正解時の自動応答画面



図11 誤答時の自動応答画面



図12 写真情報の理解

次に Listening Questions に進むと、単純にスピーカー・アイコンをクリックして mp3 ファイルの音声を再生して聞いて回答するスタイル（図9参照）や写真を見て、解答するスタイル（図12参照）などがあり、そして「解答」ボタンをクリックして、正答（図10参照）であるか、誤答（図11参照）の判断がなされ、ポップアップ・ウィンドウが現れ、正解ならば次へと進むか、不正解ならば正答を出して確認することになる。

さらに、Reading Questions についても基本的なものは同じであるが、実際に使われる税関申告書のようなもの（図13参照）や読解教材（図14参照）も少しだけ別ウィンドウに拡大して読み理解できる。できれば前者のようなフォームは、プライバシー情報であるので取り扱いには十分な注意が必要であるが、CGI を駆使してオンラインで実際に情報を埋め込み、データベース化して、私的な情報部分以外を有効利用できると良いだろう。また、学習者にとって多少とも難しい単語や語句が出てきたら、何らかのオンライン辞書機能とリンクを張るか、独自の辞書データベースにリンクを張り、それらをクリックするだけで簡単に意味が分かるスタイルになるとさらに

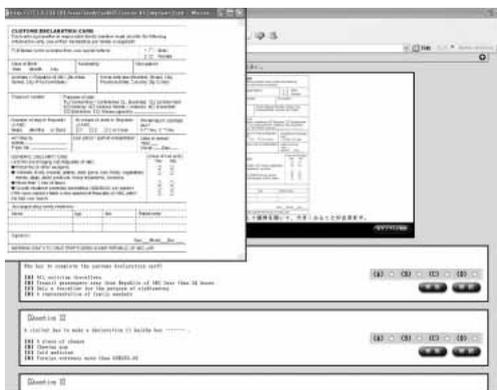


図13 税関申告書サンプル



図14 読解教材サンプル

良くなるであろう。

各学習場面に入った後、他ページに移動する際には、毎回必ずページ最下部にある「学習終了ボタン」を押す必要がある。「学習終了ボタン」を押さないと学習時間の履歴が記録されないことになるからである。

また同様に、ストーリー2では、「字幕あり」か「字幕なし」、「スクリプトと和訳」のヘルプ機能に加えて、すべての場面ではないが、「登場人物紹介」(図15参照)、各場面で出てくる英語表現などについての説明を提供する「ポイント」(図16参照)が提供されている。ただし、これらは基本的に日本語で書かれているので、できれば英語で書かれていた方が「英語で考え理解する」力をもっとつけられる材料になるのではないだろうか。このことは *e-sia* IES に限らず、多くの日本企業が開発・販売しているオンライン教材に言えることであるが、欧米の同様のものは英語だけという逆の問題点もあるので、一方だけを批判はできないものの、学習場面、演習問題は英語で後はメニューも含めてすべて日本語というのも問題ではないだろうか。繰り返し使う基本的なボタンは、もちろん英語で十分だし、必要な時にクリックして日本語訳が出てくればよいというスタイルになっていないのが残念である。やはり、コンテンツ開発における TEFL (Teaching English as a Foreign Language)、特に CALL (Computer Assisted Language Learning) の専門家の理念と実践的なアイデアが十分に反映されていないのではないと思われる。



図15 登場人物等の情報画面



図16 各場面の表現の概説画面

### 2.1.2. 「Let's Do It! (TOEIC<sup>(R)</sup> TEST の模擬問題)」

実際の TOEIC<sup>(R)</sup> TEST は 2 時間 (120 分間) で Section I の Listening100 問と Section II の Reading100 問の合計200問に答える一斉客観テストであるが、ここでの TOEIC<sup>(R)</sup> TEST の模擬問題は、同じ形式のものが12セット用意されている。このことから、受験対策としては、十分な学習ができる量が提供されていると言えよう。TOEIC<sup>(R)</sup> TEST の構成 (図17参照) についての情報を理解した上で、実際の模擬問題に取り組むが、個々の学習者の受験記録が提供され、それを確認してから受験セット (図18参照) を選択する。



図17 TOEIC<sup>(R)</sup> TEST 構成画面



図18 TOEIC<sup>(R)</sup> TEST 問題セット画面

### 2.1.3. 「Let's Try Again! (復習 TEST)」

各学習者が選択可能な「復習テスト」の「模擬問題セット」は、好みの問題セットを選択して、それぞれの「復習テスト」へ進むスタイルであるが、TOEIC<sup>(R)</sup> TEST 模擬テストを受けていないと復習はできないスタイルである。<sup>vi)</sup>

### 2.1.4. 「Check Out! (問題の正答と解説)」

「模擬問題セット」から特定の問題セットを選択して、それぞれの「PART 別正答解説」あるいは「本試験結果表示」へ進んで理解するものであり、「Let's Try Again! (復習 TEST)」と同様に、TOEIC<sup>(R)</sup> TEST 模擬テストを受けていないと見られないスタイルである。

### 2.1.5. 「Keep It Up! (オリジナル問題)」

「オリジナル問題セット」から適宜問題セットを選択して、それぞれの「PART 別正答解説」(図19および図20を参照) あるいは「試験結果表示」へ進んで検証するスタイルである。

### 2.1.6. 「Go Higher! (めざせ600点)」

このコーナーは、「TOEIC によって測定される英語力とは」、「TOEIC の出題形式」、「学習時間」、「リスニング力増強法」、「リーディング力増強法」から構成されている。「TOEIC によって測定される英語力とは」では、「TOEIC について」、「TOEIC の現状」、「TOEIC のスコアが意味すること」、「e-sia IES が目標とする英語力」に分けて有益な情報を提供している。TOEIC-IP では、通常300点から350点までの受験者がごく僅かな差で 2 番目の山を形成している。e-sia

Part	正答	問題	正答	各Part別の正答解説
PART 1	1	1	100.0%	解説
PART 2				
PART 3				
PART 4				
PART 5				
PART 6				
PART 7				
PART 8				
その他				

図19 Part 別の正答解説画面



図20 各Partの問題解説例画面

IES では、TOEIC 300点から500点レベルの学習者を対象にしているので、300点レベルの人でも、自分が特別できないという訳ではないということを認識して取り組んで欲しいと考えている。確かに、このレベルの学習者の英語学習に対するモチベーションは決して高くなく、それまでの挫折感や焦燥感もあり、やっても無理だろうという自信喪失状態の者も多い。したがって、具体的な目標設定をさせ、アニメーションを使って楽しく学ばせる工夫がされている点は評価できよう。

「TOEIC の出題形式」では、「TOEIC の構成」、「リスニング・セクション」、「リスニング各パートの出題形式と解答テクニック」、「リーディング・セクション」、「リーディング各パートの出題形式と解答テクニック」が提供されている。TOEIC 受験の具体的なノウハウの提供であるが、受験予定者には有益な情報と言えよう。

「学習時間」では、外国語学習というものがかかるものであるという半ば常識の説明から、実際にどのくらい時間をかけるべきかということについて述べている。*e-sia* IES では、3ヶ月という短期間に、TOEIC のスコアが300点から500点レベルの人が、600点に達することを目指している。TOEIC 運営委員会の発表によれば、スコアを100点上げるのに要する英語学習時間は約230時間であるということである。そうすると、スコアがちょうど500点の人は、3ヶ月で230時間となり、これを90日(3ヶ月)で割ると、1日2.5時間学習すべきであるとなる。真に学習意欲のある者ならば、日常業務をこなしながら、自宅学習でやっていける時間量とも言えなくはないが、丸々3ヶ月間そういった状態を続けることは無理だろう。スコアがちょうど400点の人の場合、600点に達するための必要な英語学習時間は500点の人の2倍となり、3ヶ月で460時間、1日当たり5時間になり、スコアがちょうど300点の人の場合には、300点アップのために、3ヶ月で690時間、1日当たり7.5時間となって、不可能な学習時間になってしまう。しかし、TOEIC 運営委員会の数字は、基本的に TOEIC スコアが500点から700点の人に当てはまるもので、それ以上のレベルを目指すにはもっと時間がかかるし、逆に500点未満の人は意欲を持って継続的に取り組めば、もっと少ない時間でスコアアップが望めるものであろう。*e-sia* IES で TOEIC の傾向と対策の基本を知り、スキット学習および模試問題をやれば、それだけでスコアが100点アップする可能性があるとする。しかし、この3ヶ月間で真剣に600点を目指している人は、*e-sia* IES に加えて、他の教材も使った自己学習などを考えて、日常業務をこなしながら、平日は1日2時間以上、土日の休日には1日5時間以上、英語学習時間を確保して欲しいとしている。これは果たして実現可能であろうか。学習時間数の差こそあれ、毎日学習し、3ヶ月間も

継続できる学習者は極めて少ないであろう。日常業務時間中にも英語学習の「研修」を受けているようなモチベーションの高い者は、もっと楽な時間配分ができ、そして短期間に TOEIC のスコアアップを達成することができよう。しかも、自分の給料アップや昇任、あるいは海外出張に関わる場合も多々あるわけで、自ずとモチベーションが高くなるので効果も違ってくる。一方、リスニングとリーディングに割り当てる時間配分は、リスニング2 に対しリーディング1 という割合が理想的であるとしている。学校英語教育の中でリスニング訓練の時間が限られている現状を踏まえると同時に、TOEIC の半分がリスニング・テストであることから、確かにリスニング力養成に重点を置くことは必要であろう。

「リスニング力増強法」では、「何についての話をつかむ」、「音読の効用」、「英語脳：英語を英語で考える脳」、「発音の仕方」の情報が提供されている。リスニングとスピーキングの相関関係が高いことは言うまでもなく、学校という英語教育現場でのリスニング力養成の不足も否めない状況であり、TOEIC 受験対策だけにとどまらず、完全主義を脱却したリスニング力養成は必要である。すなわち、リスニング力養成の基礎段階から内容語を中心とした Selective Listening を取り入れる演習カリキュラム構築やテキストの採用が必要である。e-sia IES でもそういった手法を推薦しており、補足手段としてもスクリプトを活用することで、口、耳という身体の五感を使った音読を薦めている。暗唱と言っても、単に丸暗記するのではなく、スキットの日本語訳を見て、正しいスキットの英語が口に出せるようにすればよく、これでスキットが完全理解でき、最初のうちは曖昧にしていたことも細部まで分かるようになり、リーディング力の方もアップするのであるとしている。しかし、安易に日本語訳に頼るのは良くなく、別セクションで主張している「英語で英語を考える脳」には到底なり得ないのではないだろうか。本来なら、音声認識プログラムを内蔵した録音機能があり、英語母語話者との単なる比較結果を示すのではなく、学習者の音読レベルが実際のコミュニケーションで通じるレベルかどうかぐらいの判断ができるグラフィカルな情報が提供できればよいと思う。しかし、音声認識エンジンの開発が進んでいるとはいえ、理想的なスタイルには未だ至っていない。

「リーディング力増強法」では、TOEIC の Part 5 と Part 6 を攻略するために「傾向と対策」でも述べられているように、まず高校1年ぐらいまでの英文法を身につける必要があり、そのためには、文法書を読むのではなく、文法項目ごとに例題と練習問題のついた初級（あるいは基礎）英文法問題集をやるのがよいとしている。文法は知識としてだけ頭の中にあってはダメで、実際にどう使うか、その運用の仕方こそが大事であるからであるという主張である。e-sia IES の考える到達目標にふさわしいレベルの場合とはもかく、日本の高校1年ぐらいまでの英文法というのは曖昧であると同時に少ないと思われる。もちろん、オーラル・コミュニケーションに必要な基礎文法力の修得は不可欠であり、文法項目ごとに具体例を理解しながら、練習問題をこなすことにより、正確さをまして文法力をつける方法は妥当な手法と言えよう。

また、語彙に関しては、まず高校2年ぐらいまでに覚えたはずの基本英単語3000語を、単語集などを用いて完全に思い出すことが必要である。何故ならば、内外の英語学者によれば、全てのことをこの基本3000語で言い表すことができると証明されているからであると言う。そのために、この3000語という語彙に限った隔月間の英語雑誌も（テープ付きで）発売されているし、大きな書店の洋書コーナーでは、語彙数を制限したペーパーバックも多数売られている。こういう教材

を利用して、どんどん多読し、基本単語を血肉と化し、そして少しずつ語彙数の多い本にチャレンジしていけばよいのであると主張している。基本英単語はどのくらい必要であるかという質問への解答は様々であるが、現代英語で最も頻繁に用いられる英単語 2000<sup>vii)</sup>では、BNC (British National Corpus) database and word frequency lists を活用したものを提供しているし、大学生レベルで必要とされる基本英単語リスト「JACET 8000」<sup>viii)</sup>は大学英語教育学会(JACET)が提供している。3000語レベルで十分かどうかという判断は、別の研究成果に委ねることとする。もちろん、多読訓練の必要性は言うまでもなく、できる限り多様なジャンルで読みやすい内容の読み物にチャレンジしていくことは、結果としてTOEIC 受験対策にもなるし、全体的な英語力の向上にも繋がるものである。

さらに、速読に関しても、TOEIC で要求される速読力というのは、頭から読み下して、途中で止まることなく最後まで読んでしまう程度の速読力であって、1 分間に300 words も400 words も読む、特殊な技術としての速読力は必要ないとしている。しかし、TOEIC のリーディングでは、Part IV でのように長文問題が多いので、未知の単語が何回か出てきても、その長文が全体で何を言おうとしているのかを把握した上で、前後関係や、文脈からその未知の単語の意味を推測することは十分に可能であり、英文の構造を意識しながら、読む訓練をすることを薦めている。これは正論であり、未知の単語を飛ばし読みするか、その意味を推測しながら読むと言っても、文法を無視したスタイルだけで読んではいけないのである。

### 2.1.7. 「Brush Up! (スキル別学習法)」

このセクションには、「語彙」2項目、「文法」1項目、「リーディング」2項目、「リスニング」3項目、「ライティング」1項目、「スピーキング」2項目、そして「総集編」に加えて、「効果的な学習法の体験談」1項目の合計12項目があり、スキル別の学習法についての情報が提供されている。(図21参照)「ライティング」については、ビジネスレターの書き方などが説明されているが、もう少し別の視点から「ライティング」の学習方法(例えば、プロセス・ライティングの基本など)についての情報が欲しいものである。(図22参照)



図21 スキル別学習法の選択画面



図22 ライティング項目の例

### 2.1.8. 「Trouble! (藤森ケンジの困った時の英会話)」

ここでは、主人公(藤森ケンジ)が困った16の場面(図23参照)を設定し、それぞれアニメーション

ョン静止画，基本表現と和訳とポイント説明文，会話の音声ファイルとスクリプト，スクリプト全体の和訳から構成されている。（図24参照）音声ファイルとスクリプト全体の和訳はボタンをクリックしないと再生されたり，ポップアップされたりしないが，その他のものはすべて一度に出てきてしまう。すべての学習者がすべての情報を一度に必要とするとは限らないので，必要ならボタンを押して表示できた方がよいのではないだろうか。



図23 困った時の対処法画面



図24 注文間違いの場面例

### 3 . e-sia IES 管理者ツール

e-sia IES には「管理ツール」としてマスター管理者用と担当教員用が用意されており，それぞれの ID と Password でログインし，利用する。「管理ツール」には，進捗管理，成績表，学習管理，個人情報管理，クラス設定，パスワード設定，成績表出力，一括消去，一括登録，問題作成ツールがある。マスター管理者は，当然ながら，これらすべての管理機能を利用できるが，担当教員は一部（クラス設定，パスワード設定，一括消去）が利用できない。（図25および図26参照）

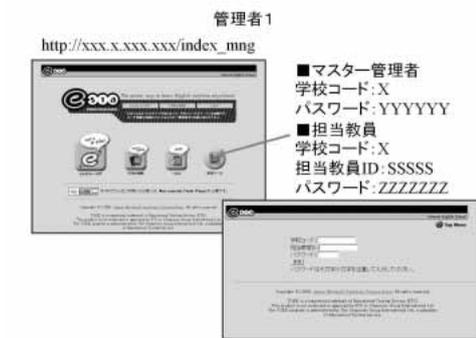


図25 管理者ログインモード画面

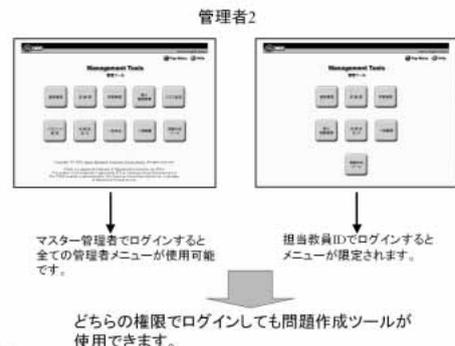


図26 管理者モードの違い

問題作成ツールを使ってオリジナル問題が作成できるが，問題登録画面から新規登録へと移り，必要事項と問題を書き込んで登録するスタイルである。（図27参照）問題セットの登録（図28参照）も同様にでき，具体的な公開期間も設定できる。（図29参照）オリジナル問題の作成が終わり，登

録されると、各学習者は図30のような画面表示で対応できる。



図27 問題登録画面



図28 問題セットの登録画面



図29 問題セット設定画面



図30 オリジナル問題の表示画面

## 4 . CD-ROM 教材

ここ数年の急速なブロードバンドの普及に伴い、プロバイダーのサーバ・メンテナンスなどの関係で利用できない期間もあり得るが、インターネットを利用して学習する時にネットワーク接続などの問題点があって簡単には利用できるようにはならない場合や、パソコンは持っているがネットワークに繋がっていないというような状況では、CD-ROM教材「インターネットで学ぶ TOEIC TEST」(図31参照)やCD-ROMとテキストの「アニメで英語 [イー・ジア]」(図32参照)を購入して利用することもできる。

## 5 . 結論

本稿は、他の似たようなインターネット利用の TOEIC 受験対策を中心とした英語学習プログ

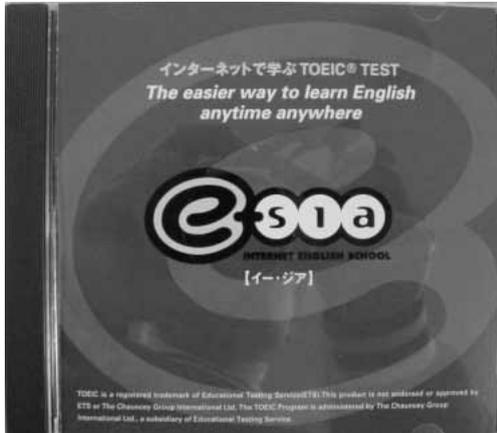


図31 e-sia IES CD-ROM 版



図32 e-sia IES CD-ROMとテキスト版

ラムとの比較を試みたわけではなく、イントラネット版を中心に、コンテンツの具体例を挙げながら、その概略を紹介することと、利点・欠点を述べたに過ぎない。実際に導入した時に、どのくらいの数の学習者がどのような利用の仕方をして、どのくらいの時間学習することによって、どの程度の学習効果が出るのかなどは、別の実証的な研究を待たねばならない。しかしながら、これまでのレビューからも分かるように、Pre-Intermediate レベルから Intermediate レベル (TOEIC スコア300点から500点レベル) の学習者にとって、アニメーションの手法を使った日本人ビジネスマンの海外出張編という場面設定で身近に感じ、コンテンツ自身を楽しみながら学習できる e-learning のひとつとして選択できるものと言えよう。

#### 資料：関連オンライン・サイト・リスト

- TOEIC Official Site <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/>
- TOEIC デイリーミニテスト <http://edu.yahoo.co.jp/school/test/toEICdaily/>
- TOEIC で200点アップ <http://www.geocities.co.jp/HeartLand/5675/>
- 英語テスト.com <http://www.eigotest.com/>
- TOEIC への道 <http://www.ne.jp/asahi/english/toEIC/>
- TOEIC マスター <http://www.toshin.ac.jp/toEIC/>
- TOEIC 900 <http://www.dl.dion.ne.jp/~ringo/toEIC900/>
- TOEIC R テスト対策 <http://www.alc.co.jp/eng/toEIC/index.html>
- TOEIC <http://ile2.doshisha.ac.jp/users/kkitao/japanese/library/kyozai/TOEIC/>

#### 注

- i) e-sia (イー・ジア) に関しては、<http://www.e-sia.com/> を参照。
- ii) 国際電気通信連合 (ITU) によると、速度に価格を加味した毎秒100キロビットあたりの費用では、日本が2位の韓国以下を大きく引き離して最低となり、日本のブロードバンドが「世界一」高性能で安いことがわかった。プロバイダーの激しい競争が、背景にあるようである。
- iii) TOEIC<sup>(R)</sup> テストに関しては、受験案内、インターネット申し込み、テスト概要、TOEIC データ集、TOEIC Q&A、公式教材、関連情報などを扱う TOEIC の公式サイト / TOEIC Official Site

- ( <http://www.toeic.or.jp/toeic/> ) を参照。
- iv ) 本稿最後の関連オンライン・サイト・リストを参照。
  - v ) アルク教育社の ALC NetAcademy ( <http://www.alc.co.jp/education/academy.html> ) はその一例である。
  - vi ) 今回のレビューを書くにあたり、残念ながら、模擬試験を受験する 2 時間余が確保できなかったため、「復習テスト」は体験できなかった。
  - vii ) <http://www.linkage-club.co.jp/ExamInfo&Data/vital2000.htm> を参照。
  - viii ) 大学英語教育学会基本語改訂委員会編 ( 2003 ) 『大学英語教育学会基本語リスト ( JACET List of 8000 Basic Words )』を参照。

## Abstract

### Review of *e-sia* - Internet English School

There are now a variety English learning sites available on the Internet. While many of these sites are available as a free resource, there are others which require the user to pay to use them. *e-sia* Internet English School (IES) (<http://www.e-sia.com>) developed and run by JANET (Japan Network Systems Corporation) is a popular pay e-learning site designed to study TOEIC (Test of English for International Communication) Incorporating animation Flash movies, *e-sia* IES is basically designed for EFL (English as a Foreign Language) learners who are in the TOEIC 300 to 500 score level.

This short article reviews the *e-sia* IES Intranet version, discusses its pros and cons, and proposes some suggestions for providing an ideal online English learning environment. I have divided this discussion into the seven major sections to describe what I see as the main aspects of the package: Introduction, TOEIC TEST and *e-sia*, a variety of learning modes of *e-sia* IES such as Let's *e-sia*, Let's Study, Let's Do It (sample TOEIC tests) Let's Try It Again (review TOEIC tests) Check Out! (Answer Keys and their commentaries) Keep It Up! (original exercises) Go Higher!, Brush Up! (skill-based learning techniques) Trouble! (main character's trouble shooting) How to Use the Management Tools, Brief Description of the CD-ROM Version, Conclusion, and Reference Web Sites.

*e-sia* IES is a good example of a pre-intermediate or intermediate level EFL e-learning site, which can be used either on the Internet or an Intranet, or even as a stand-alone EFL package. It provides listening exercises with entertaining animation Flash movies and mp3 sounds, selective captioned scripts in English and Japanese, grammar information, sample TOEIC tests, reading exercises, learning techniques, and so forth. There are, however, some limitations with the package including the fact that an institution must have a budget to purchase or lease it in order to provide this e-learning environment into its EFL program, as well as the fact that some of the business-oriented contents might be a little too easy for post-intermediate or advanced level EFL learners.